

大学に女性教員を積極的に採用しよう

松田佳子*

生化学分野での女性研究者の直面している問題点について、日本生化学会では平成14年の第75回大会から3年間大会でラウンドテーブルディスカッションを開催して議論してきましたが、日本生化学会の現状を見てみますと、総個人会員の中で女性会員は約21%です。一方、学生会員の女性比率は約34%で正会員の女性比率は約19%です。大学院では多くの女性が生化学に興味を持っていて、学生会員の3人に1人は女子学生にもかかわらず、研究者のポストについて、正会員として、活動できている女性研究者は男性にくらべて、著しく、低いこととなります。これが、独立した研究室をもつ評議員の数で見ますと、女性はわずか4%となり、日本の生化学分野での女性のキャリア形成が非常に難しい現状が浮き彫りになります。そこで、活力ある発展的な日本生化学会の未来のために、元気な若い生化学に志を抱いた大学院生を男女を問わず、励まし、支援することが重要であり、ことに、女性の大学院生を積極的に研究者になるまで育てる施策が学会としても必要であると思います。

そこで、大学の女性教員の数を積極的に増やすことが必要な時代になってきたと思います。大学学部、大学院での専門教育の場で大学院の女子学生は増えてきたが、女性教員は相変わらず極めて、少なく、女子学生がプロの自立した研究者としての意識、キャリア形成を学ぶべき女性研究者のモデルがあまりにも少なく、適切なキャリアガイダンスがあまりなされていないのが現状ではないでしょうか。優れた資質の女子学生が指導教授のお手伝いをして、便利でよくできる院生でおしまいになるのでは人材不足のこれからはあまりにも、もったいないことです。少子社会では研究者の卵の母集団も小さくなっていきます。人材の無駄使いは許されない時代になりました。同じ女性が諸外国では、就職、結婚、出産、子育て、介護をしながら、志をもちつづけて、研究者になる率ははるかに多いことは国際学会に参加してみれば、女性研究者が多いこと、自信をもって活躍していることからわかります。内閣府の男女共同参画白書平成17年版によれば研究者に占める女性割合は東欧諸国が30%強、米国32%、英、仏が26と27%に比して、日本は11.6%と国際学会等での感じを裏付ける数字が出ています。日本では、まず大学の門戸は女子学生にも開かれましたが、女性教員の採用には開かれているとは言い難い現状を変化させる勇気が必要ではないかと思います。特に国立大学での女性教員の採用は公立、私立大学に比べても際立って少ないのが現状です。国立大学法人となって、多様な人材の確保は大学にとっても重要な問題ではないでしょうか。女性教員を大学で増やすことの意味のひとつは研究の場として、多様な研究者人材を確保することによる研究分野の活性化ともう一つは教育の場として、未来の多様な研究者の育成をはかることにあります。少子化で資質を持った若い人材不足が取り沙汰されるこの頃、なかでも十分な配慮がなく、使い捨てられていた女性研究者の卵を育てあげることが外国人の活用の議論のまえに必要なではないでしょうか。また、女性教員があまりにも少ない大学では女性に関わる様々な問題が発生すると数少ない女性教員に問題が押し付けられる傾向にあり、いつの間にか専門分野をそっちのけで問題解決に尽力しなければならず、女性研究者にとっては相当な負担となっているのが現状です。大学が全ての人に真に開かれた場であるためには女性教員を増やし、女子学生がその未来に研究者としての夢を持ち続けられることが今こそ求められていると思います。そのために、教員を採用する人事担当者に男性ばかりでなく、できるだけ女性を加えることを当たり前にするなどが必要と思われます。一方、応募する女性研究者も積極果敢に自分の可能性をためてほしいと思います。たまたま、良い指導教員にめぐりあい、良い家族や支援者に恵まれた一握りの運のいい女性だけでなく、志をもって、生化学を専攻する女性大学院生が男性院生と同じように能力を発揮できる研究の場が積極的に提供されるように、少なくとも、いまの日本での研究者数の著しい男女格差が解消されて、近い将来国際学会と同じくらいの女性生化学者が活躍する日本生化学会大会が実現することを期待しています。

*徳島大学名誉教授